



Title	歴史を越境する詩
Author(s)	宮澤, 剛
Citation	越境文化研究イニシアティヴ論集. 2020, 3, p. 27-32
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/75557
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

歴史を越境する詩

宮沢 剛

宮沢剛と申します。よろしくお願いします。私は「歴史を越境する詩」という題名でお話しさせていただきたいと思います。といいますのは、歴史というのは通常、日本の歴史ですとか韓国の歴史、朝鮮の歴史、あるいは在日朝鮮人の歴史という具合に、いわば、国境線によって分断されています。さらに言えば、一つ一つの歴史の中にも節目となるような日付があつて、その前と後ということで境界線を入れられている。有名なものでは、1945年8月15日で戦前と戦後で分ける。こうした縦横に分節化された歴史認識、歴史感覚に、私たちはなじんでいるわけですが、金時鐘さんの詩は、それを一瞬、壊す、あるいは穴を開ける、そんな感覚をもたらしてくれる、そういう詩ではないかと考えて、こういう題名を付けました。

最初に取り上げるのは「馴染んで吹かれて」という詩です。これは昨年出された、詩集『背中の地図』（河出書房新社、2018年）に収められている詩で、福島の原発事故について書かれています。福島の原発事故は、しばしば熊本県の水俣病ですとか、あるいは沖縄の米軍基地と並べて語られます。そこでは国や国策企業が加害者で、庶民は被害者という図式で語られることが多いわけです。その図式は間違いなく正しいのですが、時鐘さんが、この「馴染んで吹かれて」で表現しているのはこうした状況ではなく、いわば、国家とある種、共犯的な関係を結んでしまった庶民、国民の姿なのです。こうした観点から原発と国民を戦場に駆り出すための装置である靖国神社の思想、それを並べているのです。その結果、日本人にとっては目を背けたいような、見たくない現実がここで表現されることになるわけです。

途中から読みます。

召された兵士も
晴れ着の稚児も
拍手打って参道の鳥居を巣立っていったのだ。

遺志とおりたんであった
軍服。
戦捷の新聞紙。
やたらと大きい何んとか大臣の褒状の額。

伝承はそこで
精神史となって息づいている。
諳じた信条も
言葉ひとつ平和にも
生臭い匂いがつきまとっている。
そうしてわれらは全きまでに自由なのだ。
何かを成したということもないわれらの
方便な自由が。

そのようにも裝うてすごしてきたのだ。
命を賭した英靈の賜物という
己れの嘘のまぎれもない擬態を。
明かせば自由は
利得に絡む得失であった。
破綻した原子力発電にまで利得を重ねてゆくような
取りついた中流意識が生き甲斐ともなってしまったのだ。

こうした表現で、物理的暴力によって無理やり引っ張り出された庶民ではなく、国家が提出した靖国思想に乗ることによって、精神的な利得、あるいは物質的な利得を得ようとした庶民、送り出した息子が死んでも、なおかつ、その靖国思想を手放さずに、それにすがって自らを慰めたり、あるいは自分を納得させて、その後の経済繁栄を享受する、後ろめたさをなくして享受をするという、そういう庶民の姿が浮き彫りにされているのだと思います。

原発もこうした「精神史」に連なっているのではないかという、そういったことだと思うのですが、 “明るい未来のエネルギー”、 “科学の進歩”、 こうした物語によって原発は推進され、そして、その物語を信じる、信じないにかかわらず、私たちは、こうした物

語が推進した原発のもたらす膨大なエネルギーを享受してきたわけです。さらに福島の原発事故が起こっても、息子が戦死した遺族が靖国の思想を捨てられなかつたように、原発をやめられない。原発を推進してきた自民党政権が“復興五輪”という新しい物語を作り、悲惨な福島の原発事故を国威発揚の道具に使う。そんなことが行われているにもかかわらず、企業がそれに群がり、メディアがそれを囁き立て、私たちは、その五輪を楽しもうとしている。そういう、度し難い私たちの姿というのが、ここに突き付けられているのではないかと思います。

大事なのは、「そうしてわれらは全きまでに自由なのだ」と、戦後社会の「自由」を享受する主体が「われら」と表現されているところだと思います。時鐘さんはこれまで長い詩作の中で、「私たち」、「われら」、「俺ら」という一人称複数の代名詞をたくさん使ってこられましたが、それは、ことごとく、“私たち朝鮮人”，“俺ら在日朝鮮人”という意味合いでの「俺ら」、「われら」だったわけです（正確には、司会の細見和之さんがコメントされたように、初期の詩に反米闘争を戦う者達を朝鮮人と日本人の区別なく表現した詩がある）。朝鮮人、日本人の区別なく、この社会に生きる者という意味合いでの「われら」、「私たち」というのは、僕が調べた限りでは一つしか使われていませんでした。『背中の地図』では「馴染んで吹かれて」を含めて4篇の作品（「網」「風の余韻」「夜の深さを共に」）で使われていますが、それ以前には、一つの詩にしか使われてない。

それは、「春に来なくなつたものたち」（『失くした季節』藤原書店、2010年所収）という詩なのですが、ここでやはり、日本人、朝鮮人、関係なく、この社会に生きる人々を「私たち」と表現しています。後半の部分を引用します。

それでもうららに風はわたり
絶えていっている何かが それでも
春がすみの向こうでかけろうている。
こうして私たちは
毎日何かを失っていっている。
けっしてかすかにではない。
遠目にたしかに
終わっていくものが見えている。
まぎれて浮かれて
花びらが 舞って
ああこの風とともに

私たちの運命が吹いてくる*。

*『失くした季節』では最後の2行に「この二行はリルケの詩『春風』の一節」という注が付されている。

この詩は、まるで東日本大震災、原発事故を予言しているようだと評されたこともある詩で（新船海三郎他『状況への言葉』本の泉社、2012年、194頁），確かに、原発事故以後の風景と驚くほど重なって来ます。先ほど鵜飼さんは、原発事故、大震災に、もっとも準備のできていた詩人が時鐘さんだというお話をされました。それはこの詩からも分かると思います。「春に来なくなつたものたち」では、過剰な消費や開発に巻き込まれるなかで、私たちはそうした生活を営みながら、身近な動植物やいろんな自然を失っていっている、殺しているのだと示唆されています。そういった、知らないうちに私たちが犯してしまっている罪、それを共有する者として「私たち」という人称が使われているわけです。

それは、「馴染んで吹かれて」でも同じなのです。国家の物語に乗ってしまった「私たち」。その罪を共有する者として「私たち」であり「われら」なわけです。恐らく時鐘さんが、日本人、朝鮮人、分け隔てなく「われら」という言葉を使って、それで「馴染んで吹かれて」のような、容赦ない日本の戦後社会批判を詩に表現することができた理由の一つは、この社会に生きる者の罪を共に背負う者としての「われら」、「私たち」、こうした表現をここ近年、なさるようになったからではないかと思います。

それから最後にもう一つ、詩を取り上げます。それは「窓」という、やはり『背中の地図』に収録されている詩です。ここには、北朝鮮へ帰った友人とそれを見送った「私」という人物が書き込まれています。一部を引用します。

別れは常に

思い返せるほどのへだたりしかない過去である。

またとは逢えるはずもない北の特異な国へ

声を涸らして見送ったのは私である。

叫びひとつあげたこともない窓が

以前にもまして音を断って静まっている。

いやむしろ身を乗り出して

歓呼の声をあげていたのがその窓でもある。

祖国建設に身を捧げるため北朝鮮に帰って行った友人を「声を涸らして見送った」「私」とは恐らく時鐘さんのことだと思うのですが、その姿が、「馴染んで吹かれて」に記され

ていた、わが子を戦争に見送った親の姿とダブってくるのです。つまり、国家の物語を受容し、その物語に身を捧げる近親者や友人を熱い思いで見送った者、その者の無念というところで、この靖国の一派と時鐘さんの姿は重なってくるわけです。『背中の地図』には、もう一篇、北朝鮮に帰った友人と福島から離散していく人々が並べて記されている「またしても年は去り」という印象深い詩もあります。

つまり、思いもよらないことに、原発事故と北朝鮮への帰国と、それから靖国思想と、こういった通常の歴史認識では到底結び付かないものが結び付く。そうすることによって、私たちが抱えている歴史のイメージというものが、一瞬、壊れて、違う風景が見える。たとえば、原発事故と北朝鮮への帰国事業が結びつく事によって、日本の歴史と北朝鮮の歴史を隔てている国境線に穴が開き、原発事故被災者と北朝鮮への帰国者を同時に見据える視界が開けできます。また、原発政策と靖国思想が結びつくことによって、戦前と戦後を分ける8月15日の境界線が消失し、未だに靖国思想の思想圏を生きている「私たち」の姿が見出されます。こういった歴史を越境するような感覚が、時鐘さんの詩を読んでいるとまるあるわけです。

韓国、北朝鮮、日本、それぞれの国民の意識を隔てている歴史の国境線。この歴史の国境線を越える詩を書き得るのは、「在日」という、国家のはざまを意志的に歩んで来られた時鐘さんの経歴に拠る所が大きいと思います。先に述べました「私たち」という人称の変遷も、はざまを生きてこられた故のものだと思います。しかし、ある歴史の中で節目の役割を果たしている日付、例えば、8・15（1945年・敗戦、解放）、5・18（1980年・光州事件）、3・11（2011年・東日本大震災）と言った歴史を区切る日付という境界線を越える詩が書かれているのは、また違う理由からではないでしょうか。

時鐘さんは、過去の悲劇的な出来事を教訓にしてこれからに生かすといった未来志向の詩を書きません。エッセイでもそうした主張をなさったことはないのではないかと思います。過去のある日付を記念日に定め、犠牲者に哀悼の意を捧げ、“あなた方の死は無駄にはしません”，あるいは“今の平和はあなた方の尊い犠牲があったからです”と語り、過去の出来事に意味を与える。それは一見死者を尊び、過去を引き継ぐ行為に見えますが、実際は、現在の「私たち」にとって都合の良い解釈を施し、過去の出来事を封印、忘却する儀式になっていることが多いのではないでしょうか。時鐘さんの詩に現れた過去との向き合い方は、それとは対照的です。時鐘さんには、過去の悲劇的な出来事や状況を無残なままに記憶し続けるために書かれたのではないかと思われる詩が、ここで取り上げた詩を含め、いくつもあります。そこには慰めも救いも書かれてはいません。しかし、こうした絶望的な事柄しか書かれていない詩を読んでも、不思議に息苦しさや閉塞感を感じること

はありません。それは、恐らく、詩の底に脈動している“まだ終わっていない”，“今も続いている”とつぶやく声が、読む者の現在を打つからではないかと思います。つまり、時鐘さんの詩においては、現在は過去からの問い合わせにおいて常に開かれている、あるいは晒されているということなのではないでしょうか。

“まだ終わっていない”という声は、あの日に起きた出来事はいかなる儀式によっても回復されることはないという痛恨の思いから生まれるのではないかと思います。その痛苦が現在の自足性・完結性を破綻させ、現在のただ中に過去を喚起させるのだと思います。すなわち、日付の境界線を越える詩は、過去の出来事に対する時鐘さんの痛苦に由来していると言えるのではないでしょうか。以上です。ありがとうございました。